
自殺男に壊れた少女

tamao

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自殺男に壊れた少女

【Nコード】

N4951W

【作者名】

t a m a o

【あらすじ】

人生のすべてを仕事へと費やしてきた主人公はある日突然、リストラを宣告されてしまった。親しい仲とも言えなかった彼女とも別れることになり、家族と言える人もいない状況で主人公は自分の人生の空虚さを痛感し、先が見えなくなっていた。公園のベンチで呆けていると、主人公の前に少女が現れ、突然言われた言葉は――

プロローグ（前書き）

初めて書いた中編作品を大幅リメイクした作品です。まだすべて完成していませんので、ゆっくりとしたものになるでしょうが、お付き合いいただけたら嬉しい限りです。

ブローグ

ブローグ？ <自殺男>

青いな、そう呟いたと思う。

視界に移る青は、空を見上げる青なのか、果たして俺は空を見ているのか、意識がはつきりしない。

眩しい光が眼の奥に痛みをもたらしていることを考えれば、俺は空を見上げているんだろう。

耳に入る子供の楽しい声も、主婦が話すたわいもない会話も、耳に入ってきてはいるが、それが俺の意識に起伏を与えることはなかった。

平日の真昼間。心地よい風が肌を撫でて欲しい所だったが、最近めっきり太陽の活動が活発になってきたため、肌に絡みつく生ぬるい風は、ただでさえ落ち込んでいる俺に要らない不快感を感じさせるだけだった。

気が滅入るとはこのことだ。

いや、滅入り終わったんだ。

「くそっ」

空を見上げていた顔を下す。いったいどれくらい見上げていたのか俺にもわからないが、下す際に首の骨が子気味良く音を鳴らした。同時に、頬に水が伝う感触。

視界がぼんやりしていたのは目に水分が溜まっていたからだっただのか。

泣いていたのか、目が乾いたのか。残りあるプライドにかけて前者と言い張りたい。

何故、俺がこんな平日の真昼間に公園に一人でにいるのかと言えば、まあこのシチュエーションを見れば誰もが想像できるだろうとは思う。

俺はリストラされた。

失業率が過去最低だと言われていた去年、その年を生き抜いた俺は安心したという覚えはなく、当然だと思っていた節もあったのだが、しかしそもそも、リストラというのはいつも突然やってくるものなんだと、リストラにあった先輩が言い残していたのを今更ながら思い出していた。

言われた時は実感だつて湧くわけもなく、同じ部署の奴等と一緒に先輩の去っていく姿に寂しさを感じていただけだった。

今はこう思う。今年がきつと失業率の最低をマークするだろう。

何とも自分本位で自分中心な考え方だが、それに先ほどの俺はあまり悲壮感も感じられないように見えるだろうけど、結構、いっぱいいっぱいだ。

少しでも気を緩めると、少しでも後ろ向きになると、少しでも下を向くと、そのまま二度と前を向けなくなってしまうそうなのに、精神は参っている。

失業率最高なこの社会は、なんとも当然のように就職率最低を叩きだしているのだ。

今、職をなくすことの絶望的な現実は社会人であればあるほど、社会に使っていたもののほど強く理解していることだろう。俺もそうだ。

家族に報告、なんてするわけもなく、恐らくしたところで反応なんて感情の起伏なんて怒らないくらいに静かなものになるんだろう。何時でも何時だつてそうだったのだから。俺に関しては無関心な家族とはもう何年も会っていないし、会いたいとも思わない。

しかし家族の中でも一人、いる。妹にだけは、報告してもいいかもしれない。家族の中でただ一人、俺の事を一人の人間として、空気のようであつても認識してくれていた人物。優しいとは言えなかったけど……全然優しくなかったけど……それどころか、ただただ怖かったけれど。

「……やめておこつ」

呟いた。そうだ、やめておこう。言って、どうなることもない。妹はどこまでも厳しい人だったから、何もないだろう。

そうになると、この俺が置かれた状況を説明すべきなのは……俺の婚約者だけになった。

婚約者と言っても、結婚を決めてからもうすぐ一年になるわけなんだけど。

正直気は進まない。恥ずかしいし、何より怖い。

仕事を失くした俺に残るものは何なるう？ 何もないだろ。肩書だけで生きてきたような俺だ。『。。。に務めているんだ』というだけで誰もが驚くような、そんな企業で働いているという『ブランド』が俺を少しばかり輝かせてくれていただけ。

それは宛ら、路傍に落ちた石ころに金粉を振りかけて、石を無理やり金に見せていただけなのだから。

恥ずかしいことじゃない。誰もがそうなのだ。

誰もが平凡で。

誰もがそれを輝かせることに必死になっている。

何に見せるかは、人次第。

人の価値は、持っているもので決まるのだ。

それを俺は分かっている。誰もが分かっている。

だからこそ、金じゃなくなった俺を、石ころに成り下がった俺を、彼女はどうするのだろう。

路傍の石だと、蹴り飛ばされるかもしれない。

要するに、別れることになるんだろなあ、きっと。

ぞっとした。

それでも、

「言わないわけにはいかないよなあ」

溜息をつきながら、俺は立ち上がった。

その直後、足元にサッカーボールが転がってきたのでそれを拾う。ボールが来たほうに目を向けると、子供たちが返してほしそうにこちらを見ていた。

その眼には「何で大人の人がこんなところに、こんな時間に、なにもせずいるんだろう」という嘲りの目を向けているようだ。すべて俺の被害妄想である。

実際の子供は無垢な目をしていて、真に俺を嘲る眼で見ているのはその近くにいる親達だ。

コソコソと何かを話している。俺の事だろう。被害妄想かどうかは知らん。

そんな視線は無視して、子供たちに向かってボールを軽く蹴つてやる。

「ありがとー！」

子供たちはお礼を言っすぐにボールを蹴り始めた。切り替えの早いのが子供に美点だなと思う。

大人になると、簡単に切りかえられないんだよなあ。

歩き出して、携帯を開く。

さあ、彼女に蹴り飛ばされに行きますか。サッカーボールじゃないけどさ。

「あら、そう。」

蹴り飛ばされることはなかった。まあ本当にされるとは思っていなかったけど。

電話をして、彼女が務めている会社の近くにある喫茶店へと来てもらった。

彼女は秘書をやっている。喫茶店の中でも一際目立つ整った顔と整いすぎている服装は彼女を輝かせる。俺にはもったいないくらいだ。本当に、今になって思う。

俺がリストラされたと言っても、特に彼女の表情は変わらなかった。

あくまで冷静に、冷徹に、簡潔に、感想を述べたのだった。

罵りもせず、慰めもしない。彼女らしい。

半ば予想もしていたからか、俺は思った以上にショックを受けていなかった。

……いや、それどころか、体が軽くなった。何故だろう。分からない。

「私、とっても忙しいの。大きい声では言えないけれど、会社が大騒ぎになっているの。社員は全員、大パニックなの」

「それは大変じゃないか」

「ええ、そうよ。リストラされた男に付き合っている暇なんて一分一秒とありはしないのよ」

付き合っている暇はない、か。

まあそれもそうか。

俺はもう、彼女にふさわしい石じゃない。これまでも、そうだったけれど。

「そうだよなあ。迷惑かけちゃったな、ごめん」

「……謝らないで。不快だわ」

なんとも彼女らしい厳しい物言いに、俺は口を緩ませた。

ここまではつきりと態度で示してくれると、本当に、一周回って心地いい。

「もう、話は終わりよね？ 私はもう行くわよ」

レシートを手にとって彼女は席を立った。つられるように俺も席を立つ。

「ん……ああ、そうだな。ごめんな、最後までこんな男で」

「……………」

もっかける言葉もないのか、彼女は俺を見つめるだけだ。

俺は彼女の手からレシートを抜き取った。最後まで、俺が払おう。

「明日あたりにでも、家に謝りに行っておくよ」

「……そう。そうね」平坦な声で彼女は言う。

「指輪……とかは、あー、なんだ、まあ、処理しておいてもらって

いいかな？」

さすがに彼女の指輪を捨てるなんて出来そうにないし。

身勝手だと思ったけど、彼女は何とも思っていないように「分かったわ」とだけ答えた。

淡々と、あまりにも淡々と別れの過程が過ぎ去っていくのを感じた。

それも、俺と彼女の関係を物語っているのかもしれない。

「じゃあ、これ以上時間取らせるのも悪いな」

「あらそう」

素っ気ない口調で彼女は背中を向けて歩いて行った。

その後ろ姿を見て、俺は慌ててレジにレシートを置いて「釣りは知らない」とお金（金額ぴったり）を払って店を出る。彼女は店のすぐ前にいた。

「慌ててどうかしたのかしら？」

「去り際の言葉を残そうかと思って」

「……………」

どうやら聞いてくれるようだった。

俺は一度息を吸って、吐いてから、言葉を紡ぐ。
いつも思っていた。

それは俺の人生に意味を付けるもの。

彼女に、与えることが出来なかったことを、

「いつか君の前に、最高の石ころが転がってくることを願ってるよ」

俺が慣れなかった石ころに、誰かがなって。

彼女を輝かせてあげられますように。

俺の言った言葉の意味は、彼女に分からないだろうけれど。

「あなたはいつも……………」

彼女は何かを言いかけて、小さく息を吐いた。

「そうですね……………私はあなたの、そういう所が……………嫌いでしたよ」

そう言い残して、人の中へと消えて行った。

そのあと俺はしばらく立ち呆けてた。

予想していたし、リストラという事実を受け止めていたけれど、
「思ったよりキツイなあ」

リストラも。

別れも。

仕事を失って。

彼女を失って。

失ったものは、剥がれ落ちたものは、何処かへと飛んでいく。

俺は、これから何処へ行くのだろうか。

また俺は、公園に舞い戻っていた。日は傾きだして、ベンチの影
が長く伸びている。

なんというか、暇だった。

なんにしても、暇だった。

ただひたすら、暇だった。

今日二度目の公演のベンチは、一度目よりも……ずっとずっと、
軽く感じた。

それは自分の体が軽く感じているのだ。

気が重いというのはどうやら例えでもなんでもなく、現実味を帯
びた言葉だったらしい。

そして何であろうと、失うと軽くなるものなんだなあ、なんて感
じ入ってしまう。

心であつても。肩書であつても。

今の俺には何もない。

「何も、ないんだよな……」

今の俺が置かれた状況を再認識してみれば、俺は今、とんでもな
く孤独で、とんでもなく自由なんじゃないだろうか。

開き直り、じゃない。断じて。

開放というより、解放されたような気分だ。

この時間になると、公園で遊んでいた子供たちの姿もまばらにな

ってきた。

いいな、お前らは。

これから先、いくらでも自分を、無限の選択肢の中で彩ることができるんだから。

俺なんてもうすぐ二十代の後半に差し掛かるうと言つ男だ。人生の三分の一以上を消費したことになる。

あれ？

俺はこれから、何をすればいい？

この二十何年の人生は、今日この日をもって白紙に戻された。

ここからまた、巻き返せるのか？ いや、そもそも、たどり着けるのか？

昨日までの俺に、戻れるのか？

「……無理だ」

即、言い切った。過去は過去なのだ。

戻れない。

では巻き返せる？ 過去を超えるような自分を目指す？

「出来ない」

これも即、言い切った。

これには何の理由もない。いや、あつて無いようなもの。

今の俺に、そんな気がこれっぽっちもないのだ。

無気力。まさにそれだった。

過去に満足してたわけじゃない。妥協していたのは事実だ。

でも、俺が勝ち取ったものではあつた。

空虚だった。今の俺は空っぽで、虚しい存在だ。

自虐に自虐を重ねるしかない。

俺は今、何かをしたいというものがない。

体も気持ちも軽くなって、ふわふわして、地に足がついていない。明日、彼女の両親に土下座を入れたら、すべて終わる。彼女を本当に失つて、それから、俺は何をしたらいいのだろう。

職を探す？

やっぱり家族に報告に行く？

どれもしょうと思えない。

なんだ、俺は。

何がしたいんだ？

生きたいのか？ 死にたいのか？

死にたいなら、死ねばいい。

生きたいなら、縊ればいい。

自分の問うても意味はない。答えはない。

「……………はあ」

もう、誰かに選択をゆだねたい気分だ。生きるか死ぬか。

今、俺の前を横切って行った男性にでも聞いてみようか。

俺は生きたほうがいいですか？ ってさ。

バカバカしいな。アホか俺は。

すぐに頭の中からその考えを消して、また俺は空を見上げる。

心地いい風が吹く。

なあ、風よ。

何もかも失くした空虚な俺を、何処でもいいから飛ばしてくれ。

<壊れた少女>

小さなころに読んだ本。

森の中にリスの家族がいて、その家族はみんなが仲良し。みんな

が笑ってる。

どんな「こんなん」があっても、みんなでのりこえていく。

大きな水たまりは、草の船でわたって。

深い穴は、枝の橋をつくってわたって。

みんないっしょに立ち向かう。

雨がふっても、大きな風がふいても。

家族みんなでのりこえていく。

さいごはみんな、死んじゃうけど。

それでも、わたしは、このお話が大好きだった。

みんな、笑ってるから。

みんな、みんな大好きだったから。

わたしは？ みんな、大好きです。

だいすき。

大好き。

……だいすき。

………？

「もうだめ」

わたしはつぶやいた。

もう、だめ。

なにが？

なにが、だめ？

「みんな」

そうなの？

みんなだめ？

「だめ。もう、だめなの」

なんで泣いてるの？ なんでわたしは泣いてるの？

お父さんにたたかれたから？

お母さんにむしされたから？

お兄ちゃんにおおきな声を出されたから？

わたしを、だれも見えてくれないから？

「うん」

そう。そっか。わたしは、もうだめなんだね。

「うん」

なら、いこう。

「どこに？」

わかんない。でも、わたしはわたしを見てほしいから。見てくれ

たら、だめじゃないから。

「……そうだね。そうしよう」

お友達の見えたマンガにあった、あれをしよう。

「あのマンガね。いいかもしれない」

でしょ。

「でも、だいじょうぶかな？」

なにが？

「見てくれるかな？」

……………。

「行こう」

がちやり。

いってきます。

だから、見てください。

わたしを。

あてもなく歩く、なんて少しむずかしい言葉をつかってみた。

とくに目的地はきめてない。

どこでもいいから、どこかに着いたら、だれでもいいから、だれかに話す。

ただ、それだけ。

マンガだとそれだけ。

うーん。うまくいくかな？　いくよね。

なんだか、なにをしても、うまくいく気がする。なんでだろ。

一步一步、家からはなれてる。しんぱい……してるかな。してくれてるよね。

「——ふふっ」

なんだか笑っちゃった。

楽しい。なにがって、分からないけど、これが「はいとく感」というのかも。

大人みたい。

あたるてい？

家からはなれて、どれくらい歩いたかな？ お昼ごはんを食べてから、おとうさんに叩かれて、おにいちゃんに怒られて、家を出て今はもうお空が赤くなってる。

ここは……公園だ。小さいころに、一回だけ来たことがある。この町で一番大きな公園。

公園にはいった。

夕方だから、ほとんど帰っちゃってるのか、人がいない。

ちよつと昔を思い出す。

まだ、みんなが明るかったときのこと。

みんなで遊んだこと。

ちよつとむねがあつたかくなって、少し痛くなった。

もどれるかな。

もどせるかな。

もどりたいな……。

「うっ」

下を向いちやっていたから、誰かにぶつかってしまった。

「おつと、大丈夫かな？」

わたしよりもずつと背の高いおじさんがわたしを見下ろしている。

ちよつとこわい。

おとうさんみたい。

「頭打った？ まいったな、僕は子供が苦手なんだけどね」

わたしが何も言わないから、おじさんがあわてだした。いけない、いけない。

「だいじょうぶです。ぶつかって、ごめんなさい」

ぺこり、と頭をさげた。おとうさんがよくやってるのを見てたから、すぐにできた。

「おー、こりやまた小さいのに礼儀正しいね。うん、僕もごめんね。これからは下も見て歩くことにするよ。じゃあね」

おじさんは入り口に歩いて行った。あ、そうだ、あの人にたのべは良かったんだ。

入り口に走ったけど、もうおじさんはいなかった。はやいなあ。また公園にもどる。

よし、きめた。

次に見たひとにたのもう。
きよろきよろ。

誰もいない。わたしと同じ年くらいの人はいっぱいいるけど、そんな人にたのんでも意味がないし。

こまった。ほんまつてんとう？

「だれか……いないのかな」

できれば男のひとがいい。マンガもそうだったから。

やっぱりさっきのおじさんに言えばよかったんだなあ。わたしの
ばか。

うーん、いま思ったけど、この時間に公園にいる男で大人のひとなんて、あまりいないのかも。

お仕事しているはずだもんね。おとうさんとは、ちがうんだ。

夜までまってみようかな。でも、こわいし。

……。

……。

……あ。

「いた」

おじさん。ベンチにすわってる。何してるんだろ。休憩？

すーっ姿をしたおじさんだった。むかしの、おとうさんみたいだ。

あの人にしよう。

よーし。

すーはー。しんこきゅー。

見ててください、おとうさん、おかあさん、おにいちゃん。わたしを見てください。

わたしはそれだけです。

それだけのために、がんばります。

そして、みんな、あのリスたちみたいに、なりましょう。

みんな、なかよく。

そんな「もうそう」をして、わらった。

ああ、たのしみ。

ではでは、わたし、いきますつ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4951w/>

自殺男に壊れた少女

2011年9月7日03時11分発行